

三身論に於ける台当の異目について（二）

——真流正伝鈔を中心として——

林 真 芳

随つて、『法華文句』に於ける「秘密三身」の解釈については、台家に於ても恵旦両流、並びに相生流等不同である。

日蓮聖人は、日本天台宗から出発しつつも、密教や念仏思想等を排除して、支那天台の純一無雜の法華教學を基盤として、獨創的な日蓮教學を樹立したのである。従つて、三身論に於ても報身中心であつたが、祖滅後は台密の影響により、当家に於ても古來學者の間に異義があるが、今ここでは『真流正伝鈔』によつて「三身論」について論究する。

『真流正伝鈔』に、天台の『法華文句』卷第九の、

「秘密者、一身即三身、名爲秘密、三身即一身、名爲秘密。又昔所レ不レ説名爲秘密、唯仏自知名爲秘密。神通之力三身之用也。神是天然不動之理、即法性身也。通は無壅不思議慧、即報身也。力是幹用自在、即応身也。仏於三世等有三身。於諸教中、秘密之不レ伝。」

と、法華經如來壽量品に於ける秘密三身は、爾前の諸經には

天台智者大師智顗（五三八―五九七）は、法華經の壽量本仏を解釈するに當つて、南三北七諸家と見解を異にすることに就いては、前回述べたが、天台の『法華文句』に於ける「秘密三身」の解釈によれば、法・報・應三身相即の中では、どの仏身を中心に据えるかについては、『法華文句』卷第九に、「此品詮量、通明三身。若從別意、正在報身。」と、三身即一の報身為正説を主張して、その理由について、義便・文会をもつて、三身の力用について論じている。

この思想を継承したのは、六祖荆溪の妙樂大師湛然（七一―七八二）及び、日本天台の開祖伝教大師最澄（七六七―八二二）であつたが、三代座主円仁以降、真言密教の影響を受けて、法華の仏身觀は大日法身觀に移行して法身中心となつた。

見られぬ所であると主張するとともに、三身の寿命について述べている。この、文を受けて妙楽湛然は、『法華文句記』

卷第九に、

「一身即三身等者、文中二解各有其意。初釈約三身法体法尔相即。次釈約今昔相望。以今法体望昔故也。亦可前釈通諸味。後釈斥他經。唯在二今經二故也。」

と申されている文中「前釈通諸味」の釈から、台当両家に於て、「秘密三身」に対する異説が起つたことを述べている。

始めに、惠旦兩流の説に論及し、次に相生の法橋の、三身即一・四土不二の説を評破して、当流の義を論じている。

要約すると、如来秘密の「秘」の字を釈する時は、「從一出多」の意で述べ、「密」の字を釈する時は、「從多歸一」の義によつて談すべきである。「秘密」の二字には、一多相望の義があるが、「一」とは、正在報身にして「三」とは、法・報・応の三身である。

この、三身中に於ける法身常住論は、通諸味で前四味・八教・迹門十四品と、通同の如く論ずる中古天台に於ける、「今円昔円・円体無殊」を主張する、五部共同の円仏論はとらず、『法華文句記』卷第九の、

「法身非寿、諸教常談。但未會說久成遠寿。……光宅乃以三寿量、為三延寿。」

と述べて、光宅法雲の「神通延寿」による、三世益物の義

は、天台が『法華玄義』卷第十に、

「三世益物……破神通延壽義。」

と述べ、嘉祥の『法華義疏』卷第十の、

「一者化身如来。二報身如来。三法身如来。寿量亦有三種。化仏寿量、有始有終……報身仏寿量、有始無終……法身仏寿、本自在之、不生不滅、無始無終。」

の説に対しても、『法華文句』卷第九に、

「応身非滅、唱滅者、應是法報之用。体既無滅、用豈有窮。即応身不滅。但為衆生若常見仏、則生憍恣故。唱我於今夜、當取滅度。又法身当体明三不滅。報身說三不滅、必約法身。……應身說三不滅、須約法報。法報常然、應用不絶。衆生不盡即不滅度。若法身当体論三不生滅。報身了達無能生滅。応身相統不滅。」

と論述して、南三北七諸家が、単に法身常住を以て寿量本仏を解釈せるに賛同せず、また単に応身無常を以て釈するに与みせずして、從來の三身隔歴説に対して、三身相即・報身為正の学説を樹立提唱したことを述べている。

二

天台は、經文の約束上迹化葉王の化身なる故に、日蓮聖人によつて、迹面本裏・去曆昨食と批判されたので、本化上行菩薩の再誕として塔中別付嘱を受けた、日蓮聖人は、天台の

三身論に於ける台当の異目について（二）（林）

不備なる点を補い、さらに一重深く立ち入って、三身の無始実在を唱導した。即ち、『法華真言勝劣事』に、

「問て云く。大日経の疏に云く、大日如来は無始無終なりと。遙かに五百塵点に勝れたり如何。答ふ、毘盧遮那の無始無終なる事、華嚴・淨明・般若等之諸大乘経に之を説く。独り大日経のみに非ず。問て云く、若尔らば五百塵点は際限有れば有始有終也。無始無終は際限無し。然れば則ち法華経は諸経に破せらるる歟如何。答て云く、他家之人は此義を存す。天台一家に於て此難を会通する者有り難き歟。今大日経並に諸大乘経之無始無終は、法身之無始無終也。三身之無始無終に非ず。法華経の五百塵点は、諸大乘経の破せざる伽耶之始成、之を破したる五百塵点也。大日経等の諸大乘経には、全く此義無し。」

と断じ、さらに『開目抄』に、

「雙林最後の大般涅槃經四十卷、其外の法華前後の諸大乘経に、一字一句もなく、法身の無始無終はとけども、応身・報身の願本はとかれず。」

と、報応二身の願本は法華経に限ると述べ、発迹願本の三如来を光顯した上、『開目抄』に、

「然るに善男子、我実に成仏してより已來、無量無辺、百千万億那由佗劫なり等云云。此の文は、華嚴経の三処の始成正覺。阿含経に云く初成。淨名経の始坐仏樹。大集経に云く始十六年。大日経の我昔坐道場等。仁王経の二十九年。無量義経の我先道場。法

華経の方便品に云く、我始坐道場等を一言に大虚妄なりとやぶるもん（文）なり。此過去常顯るる時、諸仏皆釈尊の分身なり。尔前述門の時は、諸仏釈尊に肩を並べて各修各行の仏なり。かるがゆへに諸仏を本尊とする者釈尊等を下す。今華嚴の台上、方等般若大日経等の諸仏は、皆釈尊の眷属なり。仏三十成道の御時は、大梵天王第六天等の知行の娑婆世界を奪ひ取り給き。今尔前述門にして十方を淨土とがり（号）して、此土を穢土ととかれしを打かへして、此土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。仏は久遠の仏なれば、迹化陀方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。一切経の中に此寿量品ましますば、天に日月の国に大王の山河に珠の人に神のなからんがごとくしてあるべきを……又、天台宗の人人もたばらか（誑）されて、金石一同のをもひをなせる人人もあり。」

以上の祖判によれば、日蓮聖人は天台の報身有始の願本説を取らずして、更に報・応無始実在の妙旨を光顯すると共に、無始無終・三身即一・報身為正説により、本化別頭教觀に立つて、寿量本仏の力用を遺憾なく発揚せられているのである。

三

『真流正伝鈔』によって、恵旦両流と相生流の義を略説すると、恵心流に於ては「前釈通諸味」とあるも、三身即一・

四土不二共に余經に明かすべからず。其の故は、三身即一諸味に通ずるならば、四土不二も通ずべし。という主張である。旦那流に於ては、三身即一は爾前の円仏の上にも明かすのである。それは、妙樂が「通諸味」と釈する故である。然れども、四土不二は余經には説かれていないと主張する。相生流では、「通諸味」の三字に「扱之」の二字を、妙樂略せりと習い伝えている。

日真上人は、恵心流の學說に与同じ、秘密三身を以て、「前釈通諸味」と云つて、三身即一諸味に通ぜば、何を以てか如来秘密というべきや。其の上、二重の釈の結文に「仏三世に於て等しく三身有り。諸經の中に秘して伝えず。」とあり、何とて諸味に通ずべけんや。と主張し、さらに、後の釈の今昔相望する如く、前釈も一代諸經に通じて、三身即一の義無しという事也。後の釈ばかりに、前四味と今の寿量と相對せりと意得べからずということを「通諸味」と釈するのである。

このように、解釈すれば「扱之」の二字を補足せずとも、寿量の正意明確となる。若し旦那流の如く「通諸味」を談ずるときは、「諸經中之を秘して伝えず。」の釈も、「発迹顯本の三如来は永く諸經に異る。」の教判が徒らとなる。

随つて、爾前經の法身常住論は、一応与えてのことで、再応奪の場合は寿量の法身常住は、法華經に限ると主張してい

るのである。祖師が、『開目抄』に「法華前後の諸大乘經に、法身の無始無終は説けども、応身報身の顯本は説かれず。」と申されている聖文を拝する時は、法・報・應三身中、法身は法華經も爾前經も通同で、法華經の特勝は報應二身の如く拝されるが、この法身論は約教別与で、一応与えてのもので、約部通奪の再応の実義に非ず。法華經の法身は、報應の顯本と共に爾前諸經に超絶せるものである。

即ち、如来秘密三身にして、爾前諸經に絶えたる特勝の三身なる故、諸經中之を秘して伝えずといい、発迹顯本の三如来は永く諸經に異ると判ぜる所以であると述べている。

四

『真流正伝鈔』に論ずる三身四土は、法・報・應三身の所に、同居・方便・実報・寂光の四土ありとする天台智顗の説で、一に同居土は、凡聖同居土の略で、凡夫と聖者とが同居する国土である。これに、穢土と淨土とあり、穢土は六道が居り国土雜穢なる娑婆世界で、淨土は四惡趣なく、人天四聖が同居する国土宝莊嚴の極樂をいう。穢土の衆生は劣応身を見、淨土の衆生は勝応身を感じる。

二に方便土は、方便有余土の略で、方便道を修して見思を斷ずる故に方便といい、塵沙・無明の惑を残す故に有余という。二乘・菩薩の住所にして、この衆生は勝応身を感じる

る。

三に実報土は、実報無障礙土の略で、無明を分々に断じて中道実相を分々に証得する故に実報といい、色心に自在を得る故に無障礙という。純ら菩薩のみの住する土、別教の地上、円教の住上の住所で、他受用報身を感じず。

四に寂光土は、常寂光土の略。常とは法身、寂とは解脱、光とは般若にして、三徳を究竟した仏の住所。ここでは法身を証得し、自受用報身に安住する。それに円教願行を修して、妙覚を感じたる者の住する仏土とする説と、周遍法界の法身の所居であるから、理土であるとする説とがある。

しかし、四土は一応の分別であって、土体は一であり、四土は娑婆に対する感見の相違にすぎないとするのが、円教の円融相即の論理であるから、妙樂湛然も『法華文句記』巻第九に、

「豈離^チ伽耶^カ別求^ニ常寂^ニ。非^ス寂光^ノ外別有^ル娑婆^ニ。」

と申されている。四土不二については、日蓮聖人も『聖愚問答鈔』に、

「今法華経は十界互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず。」と指南し、さらに『三世諸仏總勸文鈔』に、

「寂光をば鏡に譬へ、同居と方便と実報の三土をば、鏡に遷る像に譬ふ。四土も一土なり。」

と申されている。

五

天台は、始成正覺の釈尊も開近顯遠、即ち発迹顯本によつて三身円具の久成本仏なることが明かとなり、本地三仏の功德を詮量して、報身正意の顯本義を立てたのである。

この、寿量顯本義について、法身を中心とする法中論三の説、報身を中心とする報中論三の説、応身を中心とする応中論三の説が展開された。日本の中古天台の相伝書である『一帖抄』に、

「伝に云く、三身に亘て顯本を論ずべし。法中論三の三身は、住非迹非本の顯本也。報中論三の三身は、住本顯本の三身也。応中論三の三身は、住迹顯本の三身也。」

と、応中論三を住迹顯本に配釈している。また『等海口伝抄』には、

「迹門は応仏の三身也。本門は報身の三身也。本迹不二の觀心は、法中論三の三身也。」

と述べて、応中論三の三身は迹門の義としている。

且那流では、この応身を正意とする顯本思想を相伝するが、要は伽耶始成の迹仏をそのまま久遠の本地身と開顯して、事相の迹仏と思う情を払拭すれば、そこに本地身が顯現されると主張するのである。

このような、中古天台に於ける三身論は、日蓮教学にも影

響を与えたが、就中、身延の行学日朝（一二四二—一五〇〇）は、法身正意であり、慶林日隆（一二三八—一四六三）の流れを汲む八品門流と、京都本隆寺開山、常不輕日真（一二四四—一五二八）は、報身正意である。顕本法華は合掌日受（一二六九—一二七六）の、『如実事観録』に、

「寿命の顕本は、正しく応身に在り。当に知るべし。俱体俱用は直ちに理性の三身を指すに非ず……無始無終の仏界は、但だ事理一体の応身の事物を用ひて、以て仏界の体と為す。故に応身の外に仏界なし。而るに徳の辺に約して三身と名づくるのみなり。故に実を尅して体を辨ぜば、但だ一体の事物の応身なり。」

と明記してからは、応身正意説が定着したが、それまでは、三身即一の報身為正説であったようである。何れも、本化別頭の教観に達到しての三身論であることは論ずるまでもない。日蓮聖人が、当身の大事とされた『観心本尊抄』に、

「釈尊は、五百塵点乃至所顕の三身にして、無始の古仏なり。」

と、説明されているごとく、寿命本仏は五百塵点の久遠より、久修業所得・実修実証の久成本仏で、慧光照無量・寿命無數劫の智慧と寿命をもった、三身具足の報身仏であることは、『真流正伝鈔』に指南せるところである。『三大秘法鈔』は、古来真偽の論はあるが、遠成日寿（一二八九—一八五三）は、『真流正伝鈔私解』に、同鈔の、

「寿命品に建立する所の本尊は、五百塵点の当初以来、此土有縁

三身論に於ける台当の異目について（二）（林）

深厚本有無作三身の教主釈尊是也。」

の文を引証して、寿命所顕の仏は無始以来娑婆の衆生と、因縁深厚なる本覚本有無作三身仏にして、本果実証の題目を信受口唱すれば、釈尊の因行果徳の功徳は自然に譲与せられて、如我等無異の覚体を成ずると指南している。

1	大正藏經、三十四卷一二九頁A
2	同 一二九頁C
3	同 三三三頁A
4	同 三二八頁B
5	同 三十三卷八〇三頁A
6	同 三十四卷六〇三頁A
7	同 一三三頁B
8	昭定遺 三〇七、三〇八頁
9	同 五五三頁
10	同 五七六頁
11	大正藏經 三十四卷三三三頁C
12	昭定遺 三六九頁
13	同 一七〇四頁
14	天台宗全 九卷 四三頁
15	同 四九五頁
16	宗全顯本 二 一五八頁
17	昭定遺 七一二頁
18	同 一八六四頁

（前真門学林長）